

# キャリア通

- ★ キャリア教育地域推進会議を開催しました
- ★ 高知大学 横山先生のお話
- ★ 浦ノ内小の児童の記事がステキ♪



「えっ？台風？」…例年より早く梅雨入りしたものの、空梅雨が続けていたのに急に台風とは。ジメジメした日が続きますが、みなさんお変わりありませんでしょうか。



6月6日(木)に、地域推進会議の委員さんと、各小中学校のキャリア教育担当者さんに集まっていただき、県教委から須内康雄指導主事をお招きし、事務局も合わせて総勢28名で『第一回須崎市キャリア教育地域推進会議』を開催しました。

須崎市の教職員以外から、高知大学より 横山 卓 先生、保護者代表として鮫島千春さん、商工会・企業関係者として徳久和宏さんと西川謙一郎さんに委員を引き受けていただきました。



教育長挨拶、自己紹介、委員長選出(浦ノ内中の高橋校長先生が選出されました)のあと、須内主事から高知県の基本方針などを、須崎市の実態を織り込みながら分かりやすく説明していただきました。

須内主事から、推進校の校内研などに呼んでいただければ、どこにでも行きますと言っていただいています。すでに、須崎中と朝ヶ丘中が8月の校内研に須内主事をお呼びしています。



続いて私・橋村より、須崎のキャリア教育について話をしました。内容につきましては追ってキャリア通などでお伝えしていきます。

休憩の後、意見交換を行いました。

各校、各委員さんより、各校の現状やキャリア教育についてたくさんのお話をいただきました。

紙面の都合で、みなさんのお話をご紹介しますことができませんが、



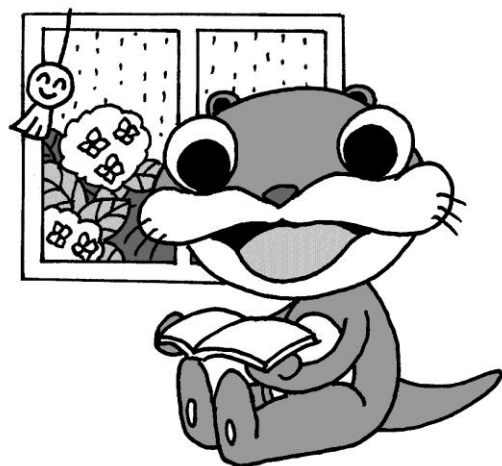
最後にお話いただいた高知大学の横山先生のお話がとても興味深かったので、次ページに書き起こした文章を載せます。

僕もそうなのですが、教師ってけっこう感覚的にモノを言うので、…例えば、

『地域が関われば 子どもたちも良くなる』ということは感覚的に分かっているけれど、なぜ？と改めて聞かれると、理論的に説明できないんですよね。せいぜい、アンケート結果を示して「ほらね!」というくらいです。

感覚的ってこと自体はすごく大事で、子どもを引きつける先生は「こうやったら子どもが伸びる」ということが感覚で分かっていたりします。

でも、3年という長いスパンで、須崎市全体でとなると、確かな理論がなければ、あれをやったらいいかも、これをやったらいいはず、になってしまいます。横山先生にはその『理論』の部分もお願いしていますが、この日のお話も『なるほど!』と思うことや知らなかったことなどが満載でした。





今日いろいろとお話を伺って思ったことを、お話しさせていただければと思います。1つはキャリアという概念ですが、今まで言われてきた『個性』とほぼイコールかなという印象をもっています。キャリアという言葉には、その子がずっと蓄積してきたこれまでの役割があって、役割というのは人間関係の中でしか出てきませんので、その人がもってる人間関係もそこには含まれているし、そこで学んだ考え方や行動の仕方も含まれているだろうと。スライドでも『自分らしい生き方』という言葉もありましたが、そういうことを鑑みていくと、キャリアという言葉は新しいのかもしれませんが、今まで言われてきた個性とほぼイコールかなという印象をもちました。

そういうふうに考えると、『個性を伸ばす』という表現と、『個性を形成する』という表現がありますけど、キャリアの視点からいうと、『個性を形成する』という文言の方がピッタリくるだろうと思います。で、『個性を伸ばす』と言った場合には、個性はもうすでに有るものとして前提されてるわけですね。幼稚園教育などでも個性という言葉が使われますけれども、そういう子どもたちの個性というものを考えた時に、キャリアの視点から考えれば考えづらいですね。あまりにも小さい子どもに対して個性ということを行ったときには、生物学的な特質とか心理学的な特質とか、そのあたりを結局さすことになるのかなあと。だけど、それと教育とはそぐわないような気もしまして、そういうことを考えるとキャリアというのとはほぼイコール個性だし、個性は小・中・高とわたって形成していくものだというふうに考えるのが妥当かなと思いました。



それからキャリア教育ですけれども、新しい概念ですし、いろんな要素が含まれてはいますが、結局のところ『学びの質を転換する』、もうこれに尽きるかなという印象です。文科省の長田調査官も『学びと社会の接続』とおっしゃっていましたが、今受けている授業がどういう意味があるのかとか、どういう意義があるのかとか、どういう役に立つのかとか、そういう今自分が受けている授業の意味を子どもたちが理解できるという、そういうところにキャリア教育の本質があるのかなあと、そんなふうに理解をしました。



それから3つ目、『職業観』ですが、これも非常に難しい事項だとなと思いました。プロ野球選手とかケーキ屋さんとかいろいろ出てきましたが、世の中の仕事の様子の中で一番多いのはデスクワークじゃないかなと思うんですが、デスクワークの良さって、どう表現したらいいか分からないですね。まあただデスクワークの背後にはいろんな人との関わりがあって、そこにはいろんな意味があるんですけれども、そういうことを考えると、世の中にいろんな職業がある中で、その職業を子どもたちにどう示していくのかということも大事なかなと。テレビに出てくる見やすいし分かりやすい仕事だけではないですので、はたからは見えにくいいろんな職業について、子どもたちにどんなふうに表現していくのかということも必要かなということも考えました。



4つ目ですが、インターンシップという言葉がずっと使われていますが、現在はインターンシップという概念を超えて、コーオペ教育という言葉が使われています。インターンシップとコーオペ教育はどこが違うかといいますと、イニシアチブをとる主体が違います。コーオペ教育というのは、インターンシップの反省から出てきているんですね。





インターンシップはどちらかというと一過性の就業体験になりがちだと。そうではなくて実際には学校の中にいろんなプログラムがあって、その中に位置づけられる就業体験なわけですね。ところが、これまでのインターンシップは、子どもたちをそちらにやって、そちらにお任せするという形態が比較的多かったという反省をうけて、コーオプ教育という概念が出てきています。

これは、教育機関の方がイニシアチブをとって進めていくという教育プログラムです。具体的には、学校の中でこういうプログラムがあって、その中に位置づいているということを経験体験先にもしっかりと理解をしていただいて、その体験の中身についてもお任せではなくて、主体の側と一緒に考えてやっていくと、そういう、思考の転換なんですけれども、そういうことも言われています。結局のところ、就業体験の前後のプログラムをどんなふうに組み立てていくのかということなんだろうと思います。この推進会議の役割の一つはそこにあるのかなあと思ったりもしています。



最後にコミュニケーション能力についてです。コミュニケーション能力の低下もよくいわれているところではあります。研究領域上、子育てに関する本やインターネットのブログなどを読むことがあるんですが、乳幼児の子どもをもつお母さんが、例えば、子どもがなかなかしゃべらないんです、といったような悩みなどを書き込んだりしてるんですね。

そういう中で、それに対するコメントとして「いろいろ手を出し過ぎなんじゃないですか」というのがあったんです。それを見てはっとしたことがあって、子どもたちのコミュニケーション能力が低下しているかどうかというよりは、その子どもが『伝わらないという体験』をあまりしてないのかなあ、というふうにも思いました。要するに、手をさしのべるといことは、伝えようとする前に周りが全部やってあげるわけですね。だけど、そうだと、しゃべる必要がなくなってしまうので、だからその『伝わらないという体験』があると、一所懸命表現しよう、しゃべろうとするのかな。

そういうことを考えると、地域との関わりであっても、全然知らない地域の方にいろんなことを子どもたちが説明するとか、そうすると一所懸命伝えないといけないですね、知らない人なので。それは、クラスの中で非常に仲のいい友達に対して自己紹介するというケースとはちょっと違って、『伝わらないという経験』があれば、子どもたちは一所懸命表現しようとするのかなあというふうにも思ったりもしました。(以下、略)

**読者が** **子ども記者だより**

統合して仲良しに

★須崎市・浦ノ内小★

4月8日、浦ノ内小学校と横浪小学校が統合しました。わたしのクラスの横浪小は女子5人と男子3人の計8人で、浦ノ内小は女子2人と男子6人で同じ8人です。合わせて16人です。

わたしは、浦ノ内の東分の戸波浦に住んでいるので、バスで登校しています。浦ノ内公民館へ集合して、午前7時39分にバスが来て、浦ノ内小へ向かいます。とてもたいへんです。でも、うれしいこともありました。新しい友達が多かったです。その中でも女子2人ととても仲良しになりました。「いっしょに遊ぼう」とさそってくれるし、「いっしょに勉強しよう」「いっしょに音楽室まで行こう」と言ってくれるので、とても毎日楽しいです。

さいしよは仲良くできそうにないなと思ったけど、今ではとても仲良しです。これからももっと仲良くしたいです。(5年、中村舞記者)

「伝わらない体験から」

横山先生が5つ目に話されていた『伝わらない体験』。今、一所懸命に伝えようという活動をしている学校があります。そう、浦ノ内小学校です。記事は6月9日の高知新聞。浦ノ内の取組みは、そのまんまキャリア教育だと、記事を読んで感激しました。